

叔母とUFOキャッチャー

植松成美

わたしの叔母は毎日ゲームセンターに通い、一日中UFOキャッチャーに明け暮れた。自分の手で獲得したぬいぐるみを眺めるのが、唯一の趣味だった。

くまやうさぎのよく知らないキャラクターのぬいぐるみチャームを集めては、海の見えるベッド横の窓際に並べる行為は、叔母にとって儀式のようなものだった。誰もがかわいいと思うようなキャラクターではなく、原色やネオンカラーの毒々しい色のぬいぐるみが、枕元までずらりと居座っていた。

隣町に大型ショッピングセンターができてから、叔母はUFOキャッチャーを目当てに毎日軽トラを走らせた。山を2つ超えなければならず、片道2時間はかった。ダブって獲得してしまったぬいぐるみは、盆でも正月でもない平日の夕方にふらりとうちに来て、当時鍵っ子だったわたしにくれた。

私が小学校から帰ってきてランドセルを下ろす頃にチャイムが鳴ると、決まって玄関に立っているのは叔母だった。実の姉妹であるはずなのに、叔母と母は仲が悪く、顔を合わせないようなので、大体家には上がらずに、顔とぬいぐるみのチャームを持った腕だけを扉から見せ、私が受け取るとニヤリと口角を上げて去っていった。

2階の窓に映る海は、今日も変わらない。漁師の夫はいつ帰ってくるかわからないので、いつでも迎えられるように、叔母は基本的には家にいなければならなかった。新婚当初は望遠鏡で夫の船が見えなくなるまで見送っていた。

叔母の髪の毛は赤い。中学生の頃、初恋の先輩に褒められてからずっと、当時と同じ市販のヘアカラーを使っている。一時は廃盤の噂が出たことをネットで知り、その時は真面目に焦っていた。髪の毛だけは中途半端になるのが許せないため、月に一回は根本を染めている。

叔母の住む村は3年前、隣町と統合された。名前上は「市」に変わったが、実際統合されてからの方がよっぽど村っぽくなったと叔母は思う。自分より年上ば